

発問タイプ作成による発問研究

取組みの柱③：発問タイプ作成による発問研究

1 発問研究の方向性

発問とは、「子どもの理解力や思考力を鍛えるために、答えを承知している教師が、問いのかたちをとって質問すること」(野口芳宏氏「教師のための発問の作法」より)である。また、「子どもたちが考える方向性をつかみ、文章のどこをどう見て、何を考えればよいのか、という指針をもつことができるもの。(考えさせるための切り口)」(多賀一郎氏「国語発問づくり 10のルール」より)である。

つまり、発問を検討することは、児童の思考力・判断力・表現力を鍛えることにつながるとともに、自力で文章を読むための視点を持たせることにつながる。学び合い、考えを深めたり、広げたりするためにも、発問の検討は必要である。

そこで、発問研究において次の2点に取り組む。

- ①発問タイプを作成し、目的に応じた発問の吟味を行う。
- ②指導案の単元計画・本時案に「発問」と「タイプ」を明記する。

2 発問のタイプ

(1) 授業の流れと発問

学習過程	発問
1 学習課題	
2 集団解決	■補助発問 <ul style="list-style-type: none">・場面の設定や人物の行動等を読み取る。・背景や人物の置かれている状況等をつかませる。・「何が?」「どのように?」「いつ?」「どこで?」「いくつ?」
3 自力解決	■主発問 <ul style="list-style-type: none">・学習課題や主題に迫るための発問。
4 ペア学習	
5 集団解決	■切り返し発問 <ul style="list-style-type: none">・考えの根拠を尋ねることで、文章に立ち返らせる発問。 ■ゆさぶり発問 <ul style="list-style-type: none">・児童が“当たり前だと思っていること”や、“思い込んでいること”, “表面的にとらえていること”に対してゆさぶりをかけることで、児童に言葉や文章を振り返らせる発問。
6 まとめ	

(2) 発問タイプと発問例

タイプ	発問例
A：記述から分かることを読み取る イメージを読み重ねふくらませたり，書かれていることから人物像を読み取ったりする発問	<ul style="list-style-type: none"> ・「ちいちゃんから見た町は，どんな様子でしょうか。」 ・「おみつさんの作ったわらぐつから，おみつさんはどんな人物だと分かりますか。」
B：言葉・表現を吟味する 言葉・表現の有無でどんな効果があるかを吟味させる発問	<ul style="list-style-type: none"> ・「どうして『スイミーはおよいだ，くらい海のそこを』と書いてあるのでしょうか。」 ・『『かけ下りた』と『下りた』では，ワタルの気持ちはどう違うのでしょうか。」 ・『『秋の日は，美しくかがやいていました』という情景描写には，大造じいさんのどんな気持ちが表わされているのでしょうか。」
C：理由を問う 主題や学習課題に迫ったり，筆者の意図に迫ったりするため，「なぜ」と問う発問	<ul style="list-style-type: none"> ・「豆太は，なぜ山の神様の祭りを見ることができたのでしょうか。」 ・「なぜ，あれほどとらえたがっていた残雪を，大造じいさんは逃がしてしまったのでしょうか。」 ・「作品全体の題名は，なぜ十二月にしか登場しない『やまなし』なのでしょうか。」
D：対比・類比 比べることで，違いや共通点を見つけ特徴を読み取らせたり，変化を読み取らせたりする発問	<ul style="list-style-type: none"> ・「与吉じいさと父の共通点は何でしょうか。」 ・「1場面と3場面で，マサエのわらぐつに対する見方はどう変わったのでしょうか。」 ・「③段落と④段落の説明の仕方の同じところはどこでしょうか。」
E：不必要・是非を問う 賛成・反対や○×，必要・不必要を問い，その理由を考えることで，読みを深める発問	<ul style="list-style-type: none"> ・『『円柱形』という言葉が一度も出てこない⑩段落は，必要ないのではないのでしょうか。」 ・「この考えに賛成ですか。反対ですか。その理由は何ですか。」 ・「事例1と事例2の順番を入れ替えてはいけませんか。」
F：選択する 選択し，その理由を考えることで，読みを深める発問	<ul style="list-style-type: none"> ・「最もすぐれているのはどれか。なぜそれがいいと考えるか。」 ・「この中で一番大事な『円柱形』は，どの段落にある『円柱形』でしょうか。」

(3) 授業上 必要な指示

記述等を探す いくつあるか探させたり，関係ある記述に線を引かせたりする指示	<ul style="list-style-type: none"> ・「本文中に『円柱形』という言葉はいくつ出てくるでしょう。」 ・「この文章は，いくつに分かれますか。それが分かる言葉はどこにあるのでしょうか。」 ・「大造じいさんの『絶対につかまえる』という気持ちが現われている記述に線を引きましょう。」 ・「この文章の問いはいくつあるのでしょうか。」
---	---

3 指導案への明記

(1) 単元計画への明記

<p>たしかめ読み</p> <p>○1場面を読み, わらぐつに対する見方から人物像を読み取る。(1)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「寒さ・静けさを表す記述を探して線を引こう。」【指示】 ・「おばあちゃんとマサエのわらぐつに対する見方はどう違いますか。」【主・D】 		○	<p>○「わらぐつ」に対する, マサエとおばあちゃんの見方を読み取り, 比べている。</p>	ノート 発言
--	--	---	--	-----------

主な発問を記入

発問タイプを記入

(2) 本時案への明記

***「ゆさぶり発問」や「切り返し発問」も想定し, 指導案に明記する。**

	<p>○類比・対比を行う。</p> <p>「おみつさんと3人を比べて似ている所や違うところは何でしょうか。」【補助・D】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・うちの人やお客さんは不格好であるという見た目に注目しているが, 大工さんはじょうぶであるという中身に注目している。 ・大工さんは見た目よりも中身を大切にしており, おみつさんの考え方と似ている。 ・おみつさんは相手のことを考えて心をこめて作っていた。大工さんも使う人の身になることが言い仕事と考えていて似ている。」 	<p>○板書や掲示物をもとに, 似ているところや違う所を探させる。おみつさんと大工さんの見方の似ているところに気づかせるようにする。</p> <p>また, お客さんやうちの人と比べ, 違いを明らかにすることで, 大工さんの見方を際立たせたい。</p>
展開	<p>○大工さんがおみつさんにひかれた理由を考える。</p> <p>「大工さんは, なぜ, おみつさんにひかれたのか3行以上で書きましょう。」【主・C】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おみつさんの作ったわらぐつを通して, おみつさんは, 使う人のことを考えて一生懸命作る人だったと思った。大工さんも相手のことを考える仕事がいい仕事と考えていて, おみつさんと同じ考えだったから。だからひかれていった。 <p>「大工さんがひかれたのはわらぐつですか。」【ゆさぶり・E】</p>	<p>○3行以上という条件を付けて書かせることで, 理由を詳しくしながら整理できるようにする。</p> <p>◎ひかれた理由を考えさせることで, おみつさんと大工さんの見方の共通点や人柄に注目させる。</p> <p>◎「おみつさんと大工さんの考え方が似ているから」といった記述の場合には, 「どういう所が似ているのか」「どういう考えにひかれたのか」と, 具体的な姿</p> <p>◎「大工さんはわらぐつにひかれたのか」とゆさぶり, おみつさんの人柄・見方に迫る。</p>

発問はMSゴシックで記入

発問タイプを記入

発問の意図を記入

(3) 発問タイプの略称

発問タイプについては、次のように記入する。

(例) 主発問・A	→【主・A】
補助発問・B	→【補助・B】
繰り返し発問・C	→【切返・C】
ゆさぶり発問・D	→【ゆさぶり・D】

4. 発問する際の留意点

- (1) 問いは単純明快，解は多様複雑が好ましい。
- (2) 書いてあることをもとにして，書いていないことを推理させる「やや難解」なものにする。
- (3) 発問をめぐって考えることで，曖昧なイメージが鮮明になることが必要。
- (4) 優しい発問から難しい発問へ，浅い発問から深い発問へ，細部から全体へ。発問を系統的にする。
- (5) 児童の実態や反応によって，発問するタイミングを考える。
- (6) 単元全体を見通す。
- (7) 発達段階に合わせて，言葉遣いや問い方を変える。
- (8) 子どもたちの興味や関心を題材に向けさせる。
- (9) 発問をして，しばらく待つ。(すぐに発言させない。)
- (10) 気持ちばかりを問わない。(人物の気持ちや人物相互の関係性が変化した出来事，情景も問う)
- (11) 教えることは教える，考えさせることは，しっかり考えさせる。